

関西大学東西学術研究所研究叢刊29

# 明清期における武神と神仙の発展

二階堂 善弘

関西大学出版部

## 序

著者の二階堂善弘氏は、先に関西大学東西学術研究所から刊行された研究叢刊27号：『道教・民間信仰における元帥神の変容』では中国の元帥神に焦点を当て、その変容を現地調査も併せ行いながら丹念に跡付け、その歴史的展開を明らかにされた。今般は、『明清期における武神と神仙の発展』と題して、これまで積み重ねてこられた明清期の武神と神仙に的を絞った優れた論考を一書に取り纏められた。中国宗教史においても、近年は近代中国を形づくってきた明清期の動向が注目を浴び、優れた研究が陸続と発表されている。本書は、まさにそこに大きな一石を投じる研究であるといえよう。

中国でも八百万と呼んでもよいほど多くの神々が信仰されているが、本書で取り上げられた哪吒太子・玄天上帝・八仙などは中国人であれば誰でも知っている神々であるという。また、仏教を代表する武神群として日本でもよく知られる四天王についても明清期におけるその変容ぶりが明らかにされた。なお、その像の姿形は日本のものとは随分と異なるという。これらの神々については、これまでは研究の対象となること自体が少なく、一般の知見の範囲に入ることもあまり無かつただけに、本章で開陳された神々の歴史像、そのはたらきや姿形などは興味が尽きないところである。本書をきっかけとして、重要でありながら顧みられることの少なかったこうした分野の研究が広がっていくことを大いに期待したい。

平成21年 2月20日

関西大学東西学術研究所  
所長 橋 本 征 治

---

---

# 目 次

## 序

まえがき	1
------	---

## 第一章 哪吒太子考 5

1. 哪吒太子について 5
2. 仏法の守護神——哪吒の変遷その一 6
3. 天界の神将——哪吒の変遷その二 9
4. 閻東海・蓮華化身——哪吒の変遷その三 15
5. 李天王・金吒と木吒 22
6. 殷郊と哪吒——『封神演義』の改作について 26
7. 中壇元帥太子爺——台湾民間信仰における哪吒 29
8. まとめ 34

## 第二章 玄天上帝考 41

1. 玄天上帝・真武について 41
2. 北帝神の真武神への影響 46
3. 玄天上帝出身説話について 50
4. 通俗文学系の資料に見える玄天上帝 56
5. 玄天上帝と明の永楽帝 60
6. 玄天上帝の地位 63
7. 現在の武当山とその宮観について 66

## 第三章 太歳殷郊考 79

1. 太歳について 79
  2. 星神・凶神としての太歳 80
- 
-

- 
- 
3. 太歳神としての殷元帥 86
  4. 『道法会元』『法海遺珠』に見える殷郊 90
  5. 日本における太歳神の影響 95

## 第四章 華光と関帝 \_\_\_\_\_ 101

1. 華光と関帝について 101
2. 元明期における関帝・華光信仰の発展 101
3. 清代以降の関帝・華光信仰 108
4. まとめ 113

## 第五章 八仙過海故事の変容 \_\_\_\_\_ 115

1. 八仙過海故事について 115
2. 八仙過海故事を描く三種の資料 116
3. 八仙の人員について 120
4. 『八仙東遊記』における先行資料の襲用 127
5. 登場する神格の差異 133
6. まとめ 138

## 第六章 十二天君と蘇州玄妙觀 \_\_\_\_\_ 141

1. 明清期の雷法 141
2. 蘇州玄妙觀と雷法 143
3. 三清殿の十二天君像 146

## 第七章 明清期における四天王像の変容 \_\_\_\_\_ 155

1. 異なる寺院の構造 155
  2. 四天王の形象について 157
  3. 通俗文学の文献に見える四天王 162
  4. まとめ 170
- 
-

---

---

## 第八章 明代における天師張虚靖のイメージ \_\_\_\_\_ 173

1. 天師張虚靖について 173
2. 通俗文学作品に見える「張虚靖」 173
3. 第三十代天師張繼先の事績と思想 178
4. 張天師の系譜に関する疑問 182

## 第九章 張虚靖と地祇酆都法 \_\_\_\_\_ 189

1. 雷法と地祇酆都法 189
2. 道教における冥界の神将 189
3. 地祇法・酆都法の由来 192
4. 張虚靖と雷法 196

## あとがき \_\_\_\_\_ 203

---

---

## まえがき

中国の神信仰の変化は激しい。現在盛んに祭祀されている神々の大半は、宋代以降に発生し、その後、明清期においてその信仰を発展させてきたものである。

前著『道教・民間信仰における元帥神の変容』においては、元帥神に焦点を当ててその変容を見ていったが、関元帥・趙元帥・王靈官といった少数の元帥神を除いては、その大部分の信仰はむしろ衰微していった。実のところ、宋から元にかけて発展していった神々の多くは、その信仰の跡を探しあてるのが難しくなっているほどである。

とはいえ、広い中国のこと、地域による差異が大きいのも確かである。同じ南方でも、広東・福建・台湾といった地域は、かなり以前の信仰をよく保存している。それに比べ、浙江・江蘇の変化は激しい。

神々の個々の信仰の差異も大きい。敢えて単純化すれば、やはり清代に発展した神々が、現在でも有力な神であると思われる。もっとも、明代と清代という両朝の間ですら、かなりその差は大きいと言ってよい。

本書は、主に明代と清代に発展し、変容していった幾つかの武神、それに幾つかの神仙について論じたものである。ただ、それぞれの論考は各個になされたため、統一的なテーマを持つてはいない。しかし、前著とは異なり、現在でも多くの廟で祭祀される神々を扱ったことになった。

まず<sup>な</sup>吒太子であるが、これは『封神演義』や『西遊記』での活躍によって知られる武神であり、台湾では太子爺として大きな信仰を有するものである。またその知名度の高さから、京劇の神怪ものでもよく登場し、テレビドラマやアニメでもおなじみの神である。この神の信仰が今のように大きく発展したのは、明清の時期である。

次に取り上げた玄天上帝は、真武大帝とも呼ばれ、世界遺産にも指定された湖北の武当山を聖地とする武神である。この神は、古の玄武が人格神に変じたものである。明代は国家守護の神として後押しされ、民間においても絶

大な信仰があった。その後清代ではやや衰えたものの、現在でも各地に廟があり、道教を代表する神となっている。

太歳殷郊は、知名度については前の二神にやや劣るが、太歳神として古くから知られた神が人格化したものである。現在この武神を単独で祀ることは少ないが、蘇州玄妙觀など、古くからの伝統を有する道觀によく祀られている。この神については、日本の宗教文化との関連についても論を試みた。

華光大帝と閻聖帝君は、明代まではほぼ同じような信仰の発展を遂げながらも、清代に大きく異なる道を歩むことになった神である。閻帝が清代に絶大とも言える信仰の隆盛を見せる一方で、華光大帝の信仰は衰微していった。この両神については、他にも論ずべきことは多いが、とりあえず明清における状況を扱うだけとなった。

さらに、神仙としては恐らく一番の知名度を誇る八仙を扱った。八仙は、李鉄拐・漢鍾離・呂洞賓・韓湘子・藍采和・何仙姑・張果老・曹国舅の八名の仙人を指す。もっとも、このメンバーに固定されるのは明末になってからのことである。特にその「過海」故事に着目し、八仙の発展を論じた。

そしてまた次に四天王の変容について論じた。四天王といえば、仏教を代表する武神であると称してよいであろう。しかし、四天王の像を見ると、日本と中国では全く異なる姿をしている。中国の四天王は、傘・琵琶・蛇(龍)・剣を持っているのである。四天王の像は、唐代頃のものが日本に流入したわけであるから、本来は同じ姿であったものが、後に変化していったと考えられる。『封神演義』の魔家四将を中心に、その明清における変容について検討した。

また別に神仙の一人として、天師張虚靖を取り上げた。実在の人物であるが、後世では『水滸伝』に見られるように、非常にマジシャン的なイメージが強い。

明清に発展した武神や神仙については、他にも取り上げるべきものは多い。また代表的なものだけを選んだと言っても、二郎神が論じられていないのは問題である。二郎神こそは、まさに哪吒と並んで武神の代表格と言えるものであろう。

ただ、中国の宗教文化における神々の数は果てしなく多く、可能な限り取り上げてみたいが限界もある。中国も「八百万<sup>やおよろず</sup>」と称してよいほどだ。そのため、他の神々については、また逐次論じていきたい。